

FLUX 41号

平成26年 3月31日 発行

秋谷 昌宏 先生 ご退職記念号



通友会

秋谷 昌宏 先生 ご退職記念号

FLUX 41号 電気通信工学科/電子通信工学科/情報ネットワーク工学科/情報通信工学科 通友会 機関紙 (発行4800部)

発行 平成26年 3月31日

編集 FLUX 編集委員会

編集委員長 竹内 真一

TEL. 045-972-5881 (内線7345)

FAX. 045-972-5972

(桐蔭横浜大学医工学部臨床工学科内)

発行者 東京都市大学 通友会会長 大島 弘之

発行所 〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1

東京都市大学 通友会

印刷所 有限会社 アレックス TEL.03-6277-1517



レンゲショウマ (御岳山)

[撮影 太田 郁夫 (S.40)]



ご挨拶

通友会 会長

大島 弘之 (S.40)



通友会会員の皆様その後いかがお過ごしでしょうか。平成22年の総会で会長をお引受してから4年がたっしてしまいました。この間なかなか思うようにできず申し訳なく思っております。

さて、通友会に多大な貢献をされ会長としても長きにわたり活躍されました大先輩であられた23年卒の三松昭典氏が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

母校は東京都市大学となり2回目の卒業生が出ました。同窓会組織も新しく代わり校友会が発足しました。長年親しんだ武蔵工業会の名前も消え去ることになりました。

このため新しく校友会役員が選出されました。通友会からは、幹事として大島弘之(S.40) 鈴木威一(S.41) 今井章久(S.44) 竹内真一(S.54) 原口兼正(S.49)が選出され、今井章久(S.44)が広報担当の常任幹事として主に同窓会会報を担当することになりました。また、次期交友会会長候補者として原口兼正氏を通友会として推薦いたしました。引き続き通友会は校友会と連携してゆくようにします。

学科の名称も変更するようお願いを出していたところですが、情報ネットワーク工学科から情報通信工学科にかわりました。めでたく通信の言葉が復活したわけです。在学生の団体である通工会との交流も少しずつですが進んでおります。

平成24年11月にはじめての試みとして通工会との合同講演会を行いました。25年度は私のミスで行えませんでした。反省するところです。

また、学生に対する奨励の意味で通友会賞を設けたいとしました。これは学術的なことだけではなく、ちょっとした工夫、善行、ボランティアなど社会貢献、地域貢献に役立った学生に贈ろうと役員で相談し決めました。自薦、他薦を問わず情報通信工学科主任教授まで気楽に申し出てください。

母校教職員では秋谷先生(S.46)が定年退職され通信科卒業の先生が、また一人いなくなっしてしまいました。今後は、学校での会合その他で様々な支障が出て来ることが懸念されます。工夫しながら活動してまいりますので、これからも宜しくお願いいたします。

3月19日に学部卒業式に出席し、情報ネットワーク工学科卒業生に通友会賞の創設などの宣伝と年会費のアピールをして参りました。これによって、通友会に興味を持つ卒業生が増えてくれることを望みます。

写真は、ヒマラヤ コンデリ峰(6160m)登頂した際に、ベースキャンプにおいて仲間と共に撮影したものです。(2013年10月26日)



第12代 通友会 会長

三松昭典さんを偲んで

副島 信治 (S.32)



三松昭典さん(S.23)が平成25年5月8日、急に旅立たれてから間もなく一年になるうとしています。あのいつものドスの効いた声と温かな眼差しが今も目に浮かびます。

三松さんは昭和23年3月電気通信工学科を卒業し通信省電波局に採用され、その後防衛庁の技術研究所で無線方向探知機の研究開発をされ、最後は富士通(株)に転職されたと聞いております。

私が三松さんと最初にお会いしたのは、(株)協和エクシオ柏会会長の時で、平成の初めの頃と記憶しております。ある時三松さんから電話があり近い内に会いたいとのことでした。数日後に連絡が有り約束の場所に行くと三松(通友会会長)さん、岡村さん(S.22)、小西先生(S.28)の三人で待っておられ、話が始めりました。

用件を聞くと、いきなり第15代武蔵工業会理事長候補者として推薦したいので承諾してもらいたいとのことでしたが、私は即座にお断りしました。その後幾度となく、三松さんと小西先生が交互に私の会社を訪問され、説得されたので、とうとう承諾することになりました。

この頃から三松さんには、公私共にお世話になる様になりました。暫くして三松さんから手紙を頂きました。時間が経過したが、次次期の武蔵工業会理事長候補者として決まりましたとの連絡でした。

其の後、私は平成15年第15代武蔵工業会理事長になり、母校75周年記念と通友会60周年記念事業を同時に迎えることになりました。同時に募金活動が始まり三松さんには募金集めと通友会60周年記念事業として電波無響室設置が決定し費用の一部を募金で補うことになり通友会会長として募金集めにも努力されました。三松さんには2つの記念事業の募金集めに大変苦勞をお掛けしたことを思い出します。

現在4号館(建築)裏の地下室に高性能の電波無響室が完成しております。電波無響室は無線工学研究に高度かつ貴重な設備と聞いております。

三松さんには武蔵工業会、通友会を始め、私自身個人的にも大変お世話になりました。もう暫く余生を楽しんで頂きたいと思っておりましたのに残念です。

三松さんの在りし日を偲び謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成26年度 総会のご案内

平成26年度の通友会総会を次のように開催しますので、会員の皆様には万障お繰り合わせの上ご出席いただきたくご案内いたします。

総 会

日 時：平成26年6月7日(土)
午後2時00分～3時00分

場 所：東京都市大学世田谷キャンパス1号館3階13D教室

議 題：1.平成25年度の報告と平成26年度の計画
2.その他

見 学 会

時 間：午後3時10分～4時30分

見学場所：通信系・医用系の研究室および実験設備、施設等

懇 親 会

時 間：午後5時00分～7時30分

会 場：新1号館4階 レストラン オーク

会 費：5,000円

同封の葉書で5月19日までに出席のご返事をお願いします。

目 次

| | | | |
|----------------------|------|-----------------------------|-------|
| 1. ご挨拶 | 1 | 5. 通友会会員からのお便り | 14～23 |
| 2. 第12代会長 三松昭典さんを偲んで | 2 | 6. 平成24年度、平成25年度通友会・総会報告 | 24 |
| 3. 平成26年度総会のご案内 | 3 | 7. 通友会賞の報告、平成26年度校友会総会のお知らせ | 25 |
| 4. 秋谷昌宏先生ご退職記念特集 | 4～13 | 8. 交流回路、会費納入及び寄付金のお願い | 26 |

秋谷 昌宏 先生 ご退職記念特集

この度、秋谷昌宏先生のご功績を称えるため『秋谷昌宏先生 ご退職記念号』の発行にあたり、先生に教えをいただいた方々から思い出をいただきました。

デバ研(電子デバイス研究室)の思い出



石井 君昭 (H.9 院H.11)

東芝ソリューション事業部
ストレージ開発部
ストレージ第一担当

秋谷先生、定年退職おめでとうございます。
私は、秋谷先生の研究室で3年間「LB膜を用いたおいセンサ」を研究していました。昨年、リクルーターとして大学に伺った際、十数年ぶりに研究室にお邪魔させていただきました。研究室の名前は変わってしまいましたが、当時と同じ実験装置が置いてあり、とても懐かしく当時の事を思い出しました。

電子デバイス研究室は、私が大学院2年生の時に新しくできた研究室でした。研究室は自由な雰囲気、自ら考えて研究を進める雰囲気でした。毎週実施されるゼミでは、自分で考えた結果を発表し、困っている点などを相談していました。私が新しい測定方法を考えていた時、相談に伺うと、「面白いね、やっぴらん」と言って、必要な測定器の調達にも協力していた

いただきました。そこで教えて頂いた「自分で考えてやってみる」ことは、今の仕事でも生かされていると思います。

しかし、秋谷先生といえば、まず思い出すのがお酒です。研究室のメンバーは皆、仲が良く、今でも交流があります。そんなメンバーとの絆を築いたのは、秋谷先生の人柄とお酒のおかげだと思います。大学生時代を振り返ると、まず研究室で何度も鍋パーティーを行ったことを思い出します。先生にも、よくその鍋パーティーに参加していただき、学生ではなかなか飲めない高級なお酒を差し入れていただいたことを覚えています。お酒の席では研究の時と違い、学生と同じように盛り上がっていただきました。また、私は先生のお持ちだった徳利の事を忘れられませんが、その徳利は、持ち上げると音楽の流れるもので、調子に乗ってたくさんお酌し、とても盛り上がったことをよく覚えています。あの徳利は、まだ健在でしょうか？今でも当時のメンバーが集まると話題になります。

昨年行われた最終講義では、先生の授業を久しぶりに受講し、当時と変わらぬ先生の姿を拝見でき、とても懐かしい思い出でした。その後のお酒も当時と変わらずお付き合いいただき、楽しい時間を過ごさせていただきました。

秋谷先生、これまで本当にお疲れ様でした。お体を大切に、末永くお元気で過ごしてください。そしてまた、機会があればお酒をご一緒

させていただきます。(くれぐれも、飲み過ぎにはご注意ください。)



卒業式の写真です。
この時も先生はビールを放しませんでした!!

時の移り変わり



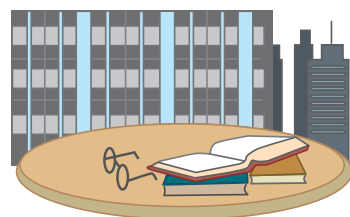
山戸 秀和 (H.5 院H.7)

NECエナジーデバイス株式会社
技術開発部 電極プロセス開発G

秋谷先生が定年退職されるとの話を聞いたのは、電気工学専攻電子回路工学修了(1995年3月)後ほぼ20年近くになった2012年末に、初めて担当となったリクルーターとして大学への連絡方法について調べるためにWEBで検索した時でした。先生が退職となるくらい時間が経ったのかと、私のことを覚えているか気になって

電話をさせていただきましたが、話をするとすぐに「エレクトロマイグレーションをやっていた山戸君か。」と思い出していただけました。

当時は思い出して話をしつつも時間が経ってしまったなあと感じました。先生の研究が半導体関係から生体医工学科で味覚センサー等の研究へ変わっていたとはいえ、時代にあったモノに変化していかなければならないかとは思いますが、リクルーターとして伺ってみると、研究室があった3号館自体が大きくなっている(新3号館の最終形態になっている。)こと、研究室から見えた図書館があったうっそうと木が生い茂っていた丘は建築学科棟(4号館)が、図書館は体育館・食堂棟(14号館)、図書館(9号館)と一緒にあって、在学中に一度新しくなった食堂が更に新しくなっていることに驚きました。



私自身も卒業後に着手した半導体関係からリチウムイオン電池関係に仕事内容を変えていますので、同じように変わっていくものなのかと認識し直しました。研究室に配属されてからのことを思い出してみると、今では当たり前になっているネットワークは整備が始まったところでワークステーション導入のためマシン名を決めて欲しいと言われ自分で決めたこと(確か「ARION」とした気がします。)や、学祭に研究室として参加する露店出店を復活させ豚汁屋を始めたこと等いろいろなことが思い出されます。

このように思い出としては、時間が経てば変

わってしまうことも多いのですが、研究室で課題を解決していく考え方や方法については、今の仕事の仕方に随分役に立っていると思います。世の中の移り変わりとは関係なく、変わらないこともあるものです。

最後となりますが、先生はしばらく非常勤講師として学校に残られるとのことですので、これまで通り、学生(教え子)を時には厳しく、そしてやさしく接して他の人の意見を聞く事が出来る人材を育成し続けていただきたいと思えます。彼らが社会へ出てからは私達先生の弟子達が彼らを育てていくことを引き継いでゆきます。

本当に、長年の教師生活お疲れ様でした。

なお、始めにある自分の写真は、2012年6月に北海道旅行へ行く寝台特急北斗星の寝台室内で撮ったもので、後の写真は昨年6月に秋谷先生を囲んで同期の仲間と一緒に写した写真です。



秋谷昌宏 先生 最終講義

医用工学科 教授 平田 孝道

ご退職されます秋谷昌宏先生の最終講義が行われました。講義前半は国際会議に参加された際のエピソードなどをお話になり、後半はこれまでの研究成果を年代順にお話になりました。講義を聴講した卒業生からは、「あれは私が計測したデータだった。」、「測定に使用した装置が懐かしい」などの声が寄せられ、秋谷先生はその反応に満面の笑みで応えておられました。静かな物腰の中に、意思の強さを秘めた先生の振る舞いに、研究者と教育者の両面を垣間見たような気がしました。最終講義終了後の懇親会では多くの卒業生が駆けつけ、研究室時代のエピソードや近況報告などを話題に楽しい時間を過ごしました。

[東京都市大学広報誌、TCU Quarterly, No.187 (2013 Mar.) より転載]



研究生活40年(最終講義要旨)

秋谷 昌宏 (S. 46)

私が大学並びに大学院を卒業してからこの度の定年退職に至るまでに約40年の歳月が流れたが研究の場は大きく2つに分類される。前半の20年間は、NTT研究所(武蔵野電気通信研究所-厚木電気通信研究所)における研究で、後の20年は大学に移籍してからの研究である。

「1」NTT研究所における研究

NTT(当時は日本電信電話公社)入社当時、今日では半導体デバイスとして一般的になっているC-MOS(Complementary MOS)デバイスは当時主流のN-CH MOSのみを用いるN-MOSデバイスを追いやる事が出来ず悔しい思いをしていた。そこで所属していた研究室(C-MOSデバイス開発を目標)が一丸となりN-MOSデバイスに対抗すべく様々な研究を展開した。私のグループはデバイスの中でも一般的であって且つ競争の激しい“C-MOSメモリ”の回路設計担当であった。約3年間の奮闘の末、当時としては世界的に見ても最高速で低消費電力な1Kbit(256x4Bit構成)C-MOS RAMメモリが完成した。この成果は後に米国IEEEの論文[1]に採録された。メモリの研究を始めた頃は武蔵野通研にも良い回路シミュレータがほとんど整備されておらず、京橋にあつたIBMの計算センターの“ASTAP”という回路シミュレーションプログラムを借りて行う事になった。当時大型コンピュータ1時間のCPU使用料が100万円近くかかり、時間を気にしながら使っていたことを思い出す。最終的にはデコーダ部並びにセンシング回路に工夫を凝らしRAM全体の回路構成が完成するまで1人で1000万円近くも使ってしまい、研究室長が押してくれる毎月の支払い伝票への捺印を恐る恐る

見つめていたことも今では懐かしい思い出である。

メモリの研究が一段落した頃、同じ研究室の製造グループで“SIMOX(Separation by Implanted Oxygen)”という画期的な製造プロセス[2]が開発された。このプロセスはイオン注入装置を用いて高濃度の酸素のイオンを基板のSiウエーハに打ち込み、その後高温アニール処理(1100℃以上)を行いSi基板中にSiO₂の絶縁層を形成する技術で、当時注目されていたSOS(Silicon on Sapphire)に代わる技術で、絶縁基板自体が安価でしかもプロセスとも馴染が良い事がうたい文句であった。

我々の回路設計グループもSIMOXの特徴を世の中に知らしめるべく、高耐圧、高精度化のデバイスを開発[3],[4]し、学会等でも発表を行った。現在、この技術は世界的に認知されており、半導体関連の学会でも一つのセッションが設けられる程の規模となっている。

このSIMOXデバイスの研究が終盤に差しかかる頃、研究所のある武蔵野市より半導体プロセスで使用した廃液等が近隣の住民に影響を与えるのではないかと疑念を持たれ、回路設計グループも含め半導体デバイス関連の研究者約300人は新設された神奈川県厚木市の山奥、“森の里”にある厚木電気通信研究所へ家族共々移籍することになった。

これを機会に私の研究テーマも回路設計から



プロセス設計に大きく方向転換をする事になった。当時LSI分野で大きな問題となっていたのは、1) Si-LSIデバイスと金属配線間の低抵抗なオーミックコンタクトをどのように実現するか、という事と、2) 配線寿命の大きな配線(耐エレクトロマイグレーション)を如何に実現するか、というものであった。この答として私が提案したのはこれまで一般的であったAl-Si配線に周期律表では原子価は2価で異なるが種々の物性定数が近いAlの一つ前の金属であるMgを少量含有させ、Mg-Al-Siの3元合金とする事であった。実験を行った結果、前記1)、2)の問題を大きく解決できる事が分った。勢いに乗り種々の学会で発表等を行った。母校の武蔵工大に移籍後も研究室に配属された学生に精力的に実験をしてもらい、数々の論文としての成果が得られた[5][6]。

特に従来より一桁低い低抵抗なオーミックコンタクトを実現できた論文では図1に示す

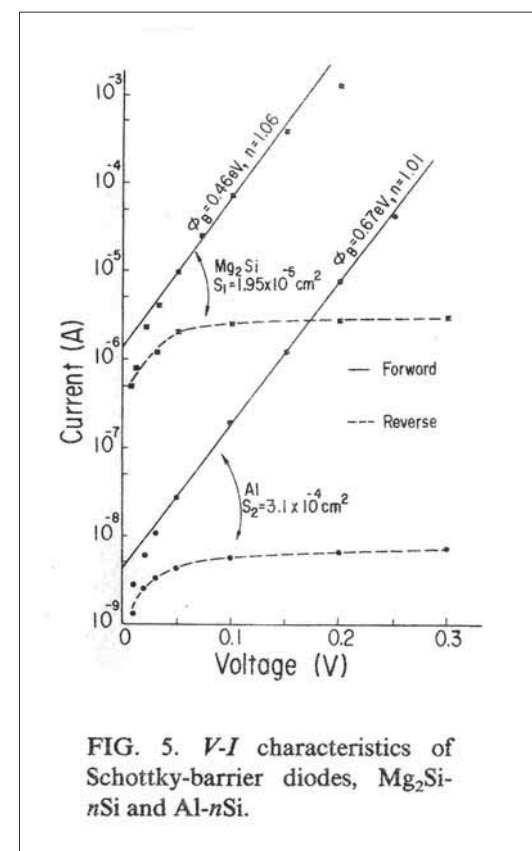


図1 V-I特性より算出した金属-半導体間の電位障壁(φ_B) (著者の測定データ)

V-I 特性より金属 半導体間の電位障壁 (ϕ_B) を算出した論文[7]中の図面が米国ボストンにあるM.I.Tの学生向けの半導体の教科書に掲載されているとの情報を当時M.I.Tの研究所にいた私の友人の研究者からその後耳にして、大変嬉しく思った。

ところでこの三元系の配線金属材料の難点は配線のエッチングを行う際のドライプロセスに馴染が悪く、通常の方法では1 μm 以下の微細なパターンを形成し難い事で、従来からのプロセスを重んじる国内の半導体メーカーにはあまり受け入れられなかったのは残念な事であった。その後今では主流となっているCu配線技術が勢いを増してきてMg-Al-Si系の配線材料の研究は縮小せざるを得なくなった。

「2」学会出張における思い出

NTT研究所に在籍していた頃の学会発表は主に国内での発表が多く、前半の回路設計に関わっていた頃は電子通信学会の大会や研究会に多く参加し、後半の電極プロセスに転向してからは応用物理学会の大会等に半年毎に必ず参加



図2 “半導体専門講習会”に講師として参加したときの記念写真

をし、北海道から九州まで様々な学会が開かれる地方を訪れた事が大変印象に残っている。特に一番思い出深いのは東北大学の総長も務められ、私の大学院修士時代の恩師でもあり且つ指導教授でもあった、西澤潤一先生から毎年夏の時期に山形県蔵王高原にある“ホテル樹林”で開催されている恒例の“半導体専門講習会(4日間泊まり込みで講演と討論を行うセミナー)”に講師として参加してくれないか、と打診があった時であった。

当時はNTT厚木研究所で配線材料の研究に没頭していた時で、思いがけないお誘いに一つ返事でお受けした。図2はセミナー最終日に皆でホテル脇のスキー場で西澤先生を囲んで撮った写真である。この講演が切掛けで翌年に西澤先生監修の「半導体研究 - 32」というシリーズ本の一部を執筆させていただき、私にとってこれが最初の著書[8]となった。

また国際会議への出張は大学へ移籍後、様々な国で行われた会議に出向いた。初めは米国のニュージャージーに本部のあるECS (The Electrochemical Society) の国際会議で米国の様々な都市に出かけた。

その後、スイスのローザンヌに本部があり現在も会員でもあるISE (International Society of Electrochemistry) 関連の会議に多く出席するようになり、ある時大変大きな出来事に遭遇する。

1997年(平成9年)夏、スペインのセビリアでの国際会議に出席のため、8月31日の昼に英国ロンドンのヒースロー空港に到着し、いつものように定宿のあるピカデリーサーカス方面行きの地下鉄に乗り何気なしに向いに座っていた人の新聞を見るとそこには“Di killed by car chase”と大見出しで書かれていた。これには同じように各地から到着し乗り合わせていた人達もびっくりして互いに顔を見合わせる程であった。つまり当時、日本でも世界中でも大きな話題になったダイアナ元皇太子妃の事故死(8月30日夜)の翌日ダイアナ妃のお膝元の地に到着したのであった。ホテルに着いてTVの電源を入れると、どのチャンネルもこの出来事の報道で溢れていた。TVを見た後、バッキンガム宮殿、並びにケンジントン宮殿等関連の場所を訪れてみたが、どこも花束やメッセージがうず高く積み重ねられていた多くの人の悲しみが直に伝わってきた。図3はバッキンガム宮殿前の光景、



図3 ダイアナ元皇太子妃の事故死(8月30日夜)の翌日のバッキンガム宮殿前の光景



図4 ダイアナ元皇太子妃の事故死の翌翌日(9月1日)の新聞の表紙

図4は翌翌日9月1日の新聞の表紙である。

「3」大学移籍後の研究

NTTの研究所で行った研究成果はその都度幾つかの専門誌に投稿し採録されていたので、前に述べた東北大学、西澤先生のご指導の下、これらを集大成した学位論文を審査していただいた。昭和62年1月に“工学博士”の学位を授与されてから暫くして、武蔵工業大学時代の卒研配属時の恩師の一人でもあつた中添淳先生より、助教授のポストがあるのでどうか、というお誘いがあった。私の地元は東京都内で、神奈川県奥の山奥で定年を迎えるのもどうか、と以前からの迷いもあつたので、お引き受けすることにした。母校に移籍後、直ちに新しい研究は出来ないで、NTT厚木研究所で退職する直前まで手掛けていたLSI配線電極の研究(エレクトロマイグレーション耐性向上と低抵抗オーミックコンタクトの実現)を続けることにした。大学には当然ながらクリーンルームも無く、サンプル作りは簡単には出来なかったが、当時郵政省、電波研究所との共同研究を通じて細々ながらLSI配線を試作し評価をすることができた[9]。

その頃、東京大学を拠点として各地の国立大学、

私立大学よりネットワークを通してLSI設計、試作を目指した組織であるVDEC (VLSI Design and Education Center)が発足し、我々の研究室も発足当初よりワークステーションを購入して参画することになった。LSIチップとしては後述するLB膜を用いたにおい及び味覚センサ用のアナログ・デジタル混載型のLSI設計を目指したが、後続の学生が途切れてしまいOPアンプ、サンプルホールド回路等の基本回路素子を含むTEG回路の設計、試作、評価までの段階で留まってしまった。

その後、思いがけず、文部省の科学研究費がもらえることになり多少纏まったお金が入ることになったので、中添先生にもお願いして大学からの研究費の一部を融通していただき、かねてから頭の中にあったLB (Langmuir Blodgett) 膜製造装置を購入することにした。この装置のおかげで「LB膜を用いたにおいセンサの研究」、「LB膜を用いた味覚センサの研究」、「LB膜を用いたイオンセンサの研究」等を新たに展開することが出来た。

まず、においセンサの研究であるが、図5に示すように水晶振動子上にLB膜という1層が数ナノメートル厚の有機超薄膜を多層に堆積したものを、においセンサとする。

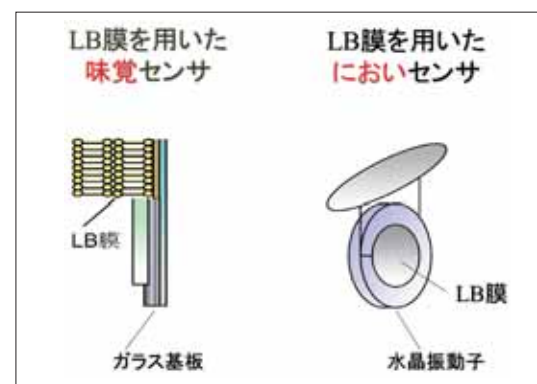


図5 基板の上にLB膜を多層に堆積した、におい及び味覚センサ

センサとしての動作は、大気中で密閉したガラスチャンパー内において物質がLB膜にナノグラム程度でも吸着することで水晶振動子の共振周波数がにおいの重みと吸着の割合に比例して変化しその時間変化から、におい物質を同定するものである。当初エチルアルコール等のアルコール系、ベンゼン等の芳香族系やアセトン等のケトン系の識別を主体[10] [11]に行っていたが、図6に示すようなウイスキー、ブランデー、焼酎等の酒類の識別[12]も可能であることも分かった。更に食品応用として野菜や牛肉等が腐敗した時に発生するにおいと腐敗時の外形変化やPH値との関連についても検証した。

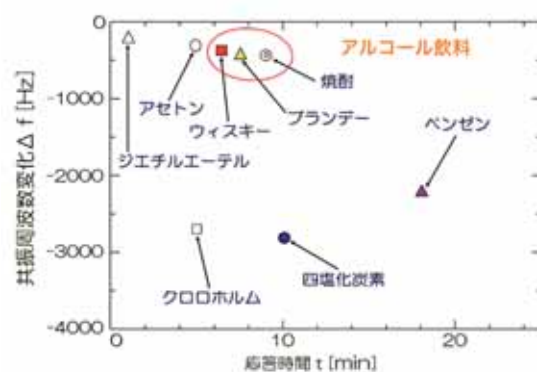


図6 各種におい物質の識別マップ

次に味覚センサの研究であるが、これは同じく図5に示すように、においセンサで使用したものと同様のLB膜を今度は金属薄膜（主にAu膜）を蒸着したガラス基板に堆積して、味覚センサとする。味覚センサとしての動作はLB膜の付いたガラス基板を味覚物質を含む溶液に直接浸すことにより、ガラス基板上の金属電極と、別の位置にある参照電極との間で電位が発生し、この電位の時間変化あるいは電位の最大値と平衡状態になった時の安定電位より味覚物質を同定するものである。なお、金属電極が蒸

着されたガラス基板は研究当初の基本五味単体の識別 [13] から、混合味覚物質が識別 [14] できるようになっては変化はないが、これを収納するホルダーについては種々の変遷があり、最終的に図7に示すような小型で携帯可能な形状[15]に落ち着いた。このような小型一体形センサホルダーを用いて図8に示すような低濃度な基本五味（酸味、塩味、甘味、苦味、旨味）の識別はもちろん図9に示すような極微量のイオンを含む市販飲料水や各地の水道水までも識別可能[16]となった。その他、各種金属電極 (Au, Ag, Cr, Ti) 等の検討[17][18]や味覚センサからの電位変化の情報を元に元の味覚物質を再

現する実験も同時に行い、梅干し味の再現までは出来ることを確認した。

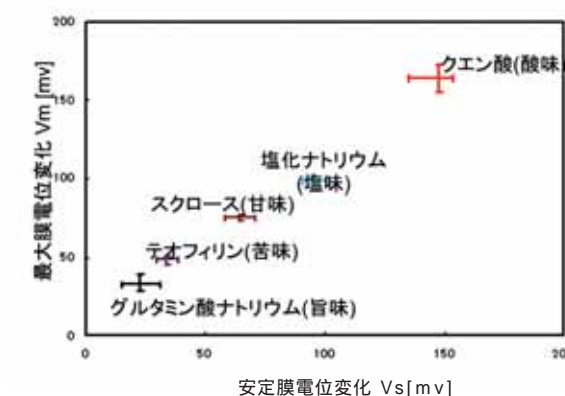


図8 低濃度 (500 μM) 基本五味の識別マップ

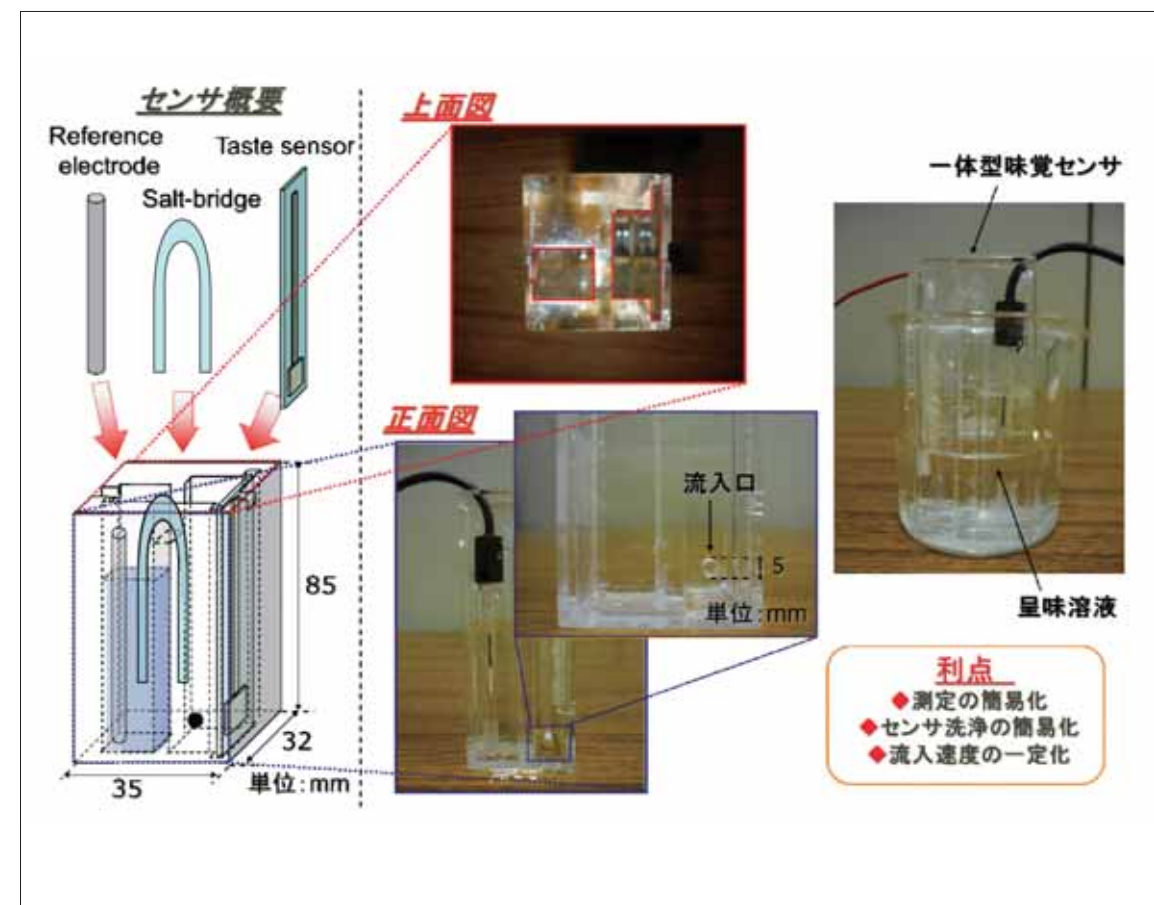


図7 小型で携帯可能な一体型味覚センサの概要

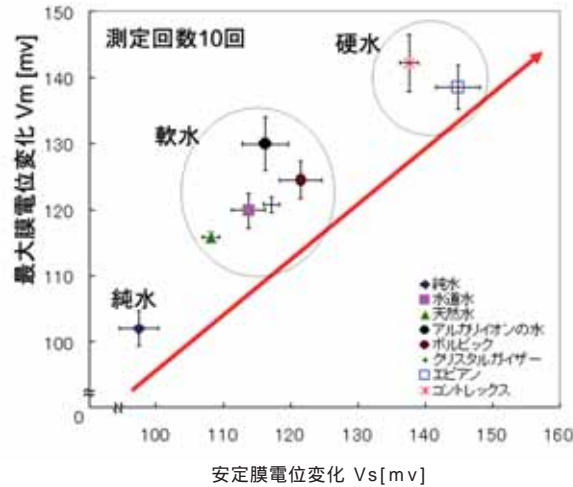


図9 市販飲料水等の識別マップ

以上これまで40年に渡る研究を簡単に述べて来たが、これは私を支援して戴いた上司並びに同僚や部下及び大学の研究室で配属された学生諸君の協力の賜物であり、この場を借りて御礼申し上げます。

この記事をご覧になり、ご意見、ご感想等をいただければ幸いです。

E-mail : jmasaj@dune.ocn.ne.jp

参考文献

- [1] M.Akiya and M. Ohara, IEEE J.Solid-State Circuits SC-14, p85 (1979)
- [2]K. Izumi,M. Doken and H. Ariyoshi, Electron. Lett. 14 p593, (1978)
- [3]M.Akiya, M. Ohwada, S. Nakashima, Electron. Lett. 17,p640, (1981)
- [4]M. Akiya, S. Nakashima, K. Katoh, IEEE J.Solid-State Circuits SC-19, p 526 (1984)
- [5]M. Akiya and I. Ishii, J. Electrochem. Soc., 141, p2857, (1994)
- [6]M. Akiya, H. Yamato and K. Furusawa, J. Physics D:Applied Physics, 32, p1773 (1999)
- [7]M. Akiya and H. Nakamura, J.Appl. Phys., 59, p1596, (1986)
- [8]秋谷、半導体研究(西澤潤一編)、工業調査会、32, pp33-62 (1990)
- [9]M. Akiya, K. Saitoh and K.Sakai, J. Physics D:Applied Physics, 34, p3214 (2001)
- [10]松崎、高野、秋谷、電気学会論文誌 E,120, p588 (2000)
- [11]荘、新井、秋谷、電気学会論文誌 E,123, p43 (2003)
- [12]M.Akiya and H. Yamada, Electrochem of SCI, Abs.Book, Electroanalysis, P-1 (2005)
- [13]石井、秋谷、電気学会論文誌 E,120, p521 (2000)
- [14]長谷部、平田、秋谷、電気学会論文誌 E,129, p47 (2009)
- [15] M. Akiya, T. Hirata and R. Kagiwada, 9th Spring meeting of ISE, P-056 (2011)
- [16]今泉、須藤、鍵和田、平田、秋谷、第59回応用物理学関係連合講演会予稿 p12-100 (2012)
- [17]高藤、秋谷、電気学会論文誌 E,125, p141(2006)
- [18]横谷、平田、秋谷、電気学会論文誌 E,129, p338 (2009)

会員だより

会員の皆様は、如何お過ごしでしょうか。会員相互の交流を活性化する目的で、本号から、会員の皆様の主張、言いたいこと、聞いてほしいこと、活動状況、

近況などを掲載するこのコーナーをはじめさせていただきます。



近況報告

福田 正 (S.25)

私達昭和25年度卒は大学移行となったので旧武蔵工専では最後の卒業です。毎年級友が集まっていましたが、1人逝き2人去りで現在10人位が居りますが、去年はあそこが痛い、ここがだめで4人が出席しただけです。

皆は85歳前後なので無理もありません。



近況報告

片岡 徳昌 (S.28)

卒業してからすでに60年経過し、大学生活が一昔前の出来事のようになっていました。何もかも不足だった昭和24年電気通信工学科に入学しました。

当時の大学の木造校舎、階段教室、多摩川の広いグラウンド、甘藷畑等を懐かしく思い出します。

慣れ親しんだ校名が変更になった事には一抹の寂しさを覚えますが東横学園女子短大との合併によって益々の発展を願っています。

私は元気ですが股関節の手術をしたワイフの手助けのため、買物、炊事ができるようになりました。退職してから、地区会館で始めた卓球・屋上での菜園を楽しんでいます。



近況報告

上野 啓二 (S.33)

E-mail : ueno625@green.ocn.ne.jp

連絡頂きありがとうございました。昨年从今年までの2年間は4週間ずつ3回、肺がん、糖尿、左骨上腕骨折、で病院に入院しておりました。目下残るは骨折のリハビリに励んでいる始末です。

3年前でおおむね仕事からリタイアしてパソコン遊びをしておりまして、ショルダーバッグの中にはスマートホン、タブレット、カメラ、ICコーダー、など入れてぶらついて足力をつけています。

あとは孫にアニメなどの動画をDVDに入れて送っているというのんきな毎日です。

糖尿で酒が多くは飲めないの、せいぜいコーヒーのうまいところを探して飲みについてます。

ご連絡まで。



同期の近況

三宅 将善 (S.33)

昭和33年卒は今や平均寿命年齢に達し、昨年夏の長い猛暑が応えた年になりました。

数年前に、北陸5人衆の献身的な企画で大旅行を催して以降、最近はだんだん集まる機会が少なくなってきました。その旅行は、“立山貫光旅行”と称して、金沢・能登・立山アルペンルートと日本中部を縦断するものでした(平成14年8月)。片岡先生にもご参加いただき皆の好評を得、アンコール企画をお願いし、4年後に高山・新穂高の旅行が実現しました(平成18年10月)。

最近は、久し振りに連絡してみると入院している人もあって、“お元気ですか？ コール”を試みました。永年勤めた会社関連業界の組織や地域で責任ある立場で活躍している人々、会社を営し

地域の名士になっている人、ボランティアでホームを1500回以上も慰問し皆から喜ばれ敬愛されている人、趣味の同好会を立ち上げ市の組織として運営し地域で活動している人など、元気な人達がいる一方で、不幸にして3.11等の災害に遭遇されたり、通院が欠かせない、ホームに移住し年賀状も省略したいという方々や、連絡のとれない人もあります。

年齢的に致し方ないことではありますが、皆できるだけ健康で日常生活ができることを願っています。最近では医療が物凄く進歩していますが、できれば病院通いが避けられるよう、体を動かして筋力・脳の活性化を促したいと考えています。



2013年は過去の失われた20年から、ようやく潮目が変わり始めた年になったと思われま。グローバルな時代、世界で起こる出来事が敏感に反映され、リスクの大きい社会ですが、それらを克服して2014年は難しい“第3の矢”がうまく成功して活力のある日本になることを期待しています。

幸福は人夫々で定義できないと言われますが、夫々が日々の課題を完遂して安全で安心できる円満な人生を楽しめればと願っています。

訃報のご連絡です。

昨秋から入院療養中でした、33通信卒 菅原重君が1月2日に亡くなりました。級友から親しまれ信望の厚かった同君を、1月9日の通夜と1月10日の告別式 夫々8名で、お送りいたしました。1月10日には、片岡先生もご参列くださいました。

老後生活とその充実に向けて

中添 淳 (S.34)

通友会総務秋谷氏より会長名で各期幹事あてにということで会誌への原稿を依頼されました。「各期のクラス会、会員の状況と、または個人の近況でも」とのことでしたが、武蔵工業会の総会活動が盛んであり、各期のクラス会を開く習慣が身に着いておりません。工業会総会での我々のクラス出席者はわずか2,3名程度で、出てくる顔ぶれはいつも同じです。雰囲気的には、各人の生活

環境、健康などの理由から今後各科のクラス単位での活動が沈滞するのは止む得ない年齢とも感じております。クラスとして各位への連絡も次第に疎かになり、年齢的にも組織を支えていくことが難しく、消極的になっております。従って、我が昭和34年通卒クラスとしては、この近年は殆ど活動は致しておりません。これは幹事の怠慢に尽きるところが大で、大変申し訳無く思っております。そこでやむなく自分の近況を書く事に致しました。

さて小生の近況ですが、満77歳を過ぎ、健忘症が著しく、老いを自覚せざるを得ません。特に退職後から近々の事を忘れるのが次第に多くなってきました。先日中学と高校の同窓会が久しぶりに、郷里の札幌で開催されました。出席して皆に会うと古いことは良く覚えておりますが、開催日時などを確り覚えて間違いのない様にするには努力が要ります。また、大学全体を対象に柏樹会という定年退職者同窓会のようなものを立ち上げ、そこで親睦、温泉旅行を企画、去る11月26～27日に伊東温泉へ出掛け、総勢11名で心の洗濯をして参りました。この会は毎年新しく会員が入ってきますが、発足も比較的新しく流動的に活動しているため会員間の連絡も現在は何とか確保しております。そろそろ幹事役を後輩に譲る頃と考え準備しております。

日常生活的には、若い時代から音楽を聴くのが好きな少年で、特にピアノ音楽には強い興味を持ち続けて居りましたので、老後の余生は、柄にもなく、ピアノに触ること？（あえて弾くとは言いません）にしました。趣味三昧に浸れる様にするには、せめて良い楽器に触れたいとの思いから、ピアノはスタインウエー（アメリカ）、ベーゼンドルファー（オーストリー）、ベヒシュタイン（ドイツ）という世界3大メーカを対象に、いろいろ調べましたが、小生の望みに適した“製作志向と気品”を備えたベーゼンドルファー（グランド型）を“終生の心の友”として選んでありました。定年退職後の年金生活に入って殆ど毎日触って、精神的な満足も以て、雰囲気と音色の音楽を楽しんでおります。心の友としては、少し値が張りましたが、これ位の贅沢は許して貰えるものと考えて、なけなしの財を叩いて求めたもので、まさに「病膏育に入る」と言ったところと自分ながら苦笑しております。

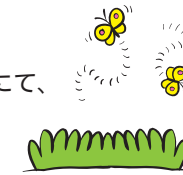
練習歴は相当ありますが、一向に上達しません。しかし、老化防止のための指による脳の刺激にも良いとのことで、大いに気を良くして、現在は女房にしごかれながら練習して居ります。下手な演奏でも自分で弾くと音楽に対する理解が一層深まり、情操的にも穏やかになり、それなりに満足した老後の毎日を送れる幸せを感じております。

近況報告

宮田 孝博 (S.35)

現在、後遺症に依る体調不良にて、活動は休止中です。

リハビリに動しんでおります。



二十年ぶりの38年卒同窓会

佐藤 光司 (S.38)

E-mail : cys96288@mwb.biglobe.ne.jp

等々力渓谷写真撮影と散歩

等々力渓谷入口に14名が10時30分に集合し、徳島からは三木俊君、三島からは折田浩君、若い奥さんを最近もらった長谷川裕君、脳梗塞で倒れた清水俊介君、彼は車椅子での参加かと思ったが、杖を突いて等々力駅から東京都市大学まで歩きました。写真撮影は、ゴルフ橋、利剣の橋、等々力不動尊の三ヶ所で行いました。武蔵野台地を矢沢川が浸食してできた全長約1kmの等々力渓谷、我々が武蔵工業大学にいたとき歩いたかもしれないし、初めて知った場所かもしれないが、皆でわいわい話しながら一時間半、地元を知っていただくためそこから分かれて、丸子川の辺を歩いて昔の下宿のあった場所を見ながら、思い出しながら、今は面影のなくなった昔の一号館の場所に着いた。

等々力渓谷散歩 H25.11.24



第5回ホームカミングデーに参加

学内見学が行われ、医用工学科臨床器械工学研究室、ミクロの世界を探る電子顕微鏡によるいろいろな工学に共通に使える各種装置の見学、新しい図書館に展示されたミクロの世界の写真等を見学し、母校の変貌を見て昔の面影はなくなっていた。そして、歓迎式典、東横学園と武蔵工業大学の歴史の説明、そして、東京都市大学の新学長北澤宏氏による「日本百年の計」という題目の講演があり、その後3号館4階のメモリアルホールでの懇親会に参加し、武蔵工業大学の最後の学長であった中村英夫氏を囲んで記念写真を撮った。宮城の蔵王から荒川純一君が参加した。



38年卒通信科同窓会

平成5年4月17日にホテル・パシフィックで行われた同窓会から二十年ぶりに自由が丘駅から1分のところにある「土風炉」で、中添淳先生を招いて同窓会を開催した。

中添先生を連れてこの部屋に入ったときに、「あなたは誰ですか？」と石井武君が聞いた。思わず驚いたが久しぶりの再会なので、すぐには分からないことがあったかもしれないが、しばらく話をしているとだんだんと分かってきました。中添先生を含めて25名が集まって記念写真を撮影した。この会で、幹事を波藤雅俊、早川史郎から佐藤光司、今野彰に変更して今後毎年行うこととした。連絡はメールで35名、葉書で25名の連絡できる体制で行うことに決めた。同窓生の参加者は、荒川純一、石井武、江口茂人、尾田鴻一郎、折田浩、

神永照夫、木村真、今野彰、佐藤勲、佐藤光司、清水俊介、田口霸洲男、高安國臣、長谷川彰、長谷川裕、早川史郎、藤井鋭寿、倉田茂彰、萬濃健、三木俊、水間照、森松幹治、山田博之、手塚祐幸の24名でした。



平成26年1月29日 田中先生宅訪問

「今年で96歳(午年)、93歳の時、自宅で倒れて柱に頭を打ち、それが原因で脳梗塞になり、昨年からリハビリをしたが担当した先生は歳だから直らないといわれていた。口も利けず、しゃべることもできず、字も読めない状況から昨年よりだいぶ回復して、歩行もできるようになり大分回復してきた状態なので、暖かくなった頃には皆さんと会えるかもしれない状況です。」とのことでした。



活動報告

片田 安彦 (S.39)
katada4218@hi-ho.ne.jp

2014年は卒業以来50年となります。現在の同窓会活動は音響研究室を中心とした「音研会」(メンバーは約15名)と研究室横断的な「三九会」(メンバーは約40名)の2つがあります。

「三九会」は毎年新年会と一泊旅行を開催しています。2013年6月には母校の見学会も開催いたしました。「音研会」は卒業以来毎年忘年会を開催しており、結束の強い会です。

毎年物故者が増え葬儀で顔を合わせる事が多くなったのは仕方のないことかと思いますが、元気なうちにできるだけ連絡範囲を広げるようにしています。

近況報告

本橋 良一 (S.39)

14年前新電元工業(株)(半導帯電子機器電源製造会社)を定年退職後地元地域の人達と親しみ、音楽、コーラス、グランドゴルフ、旅行、太極拳をやり、今は家庭菜園を楽しんでいます。社会的大きな活動はしていませんが、地域にとけ込んで毎日元気に過ごしています。

現在74才。



母校への恩返し

鈴木 威一 (S.41)

A) 同期の近況

41年卒業の現役組は70歳の古稀を迎えた。そのため、11月24日のホームカミングデーの際は、41年卒業でE-mailで連絡のつく人50人ぐらいに、参加を呼び掛けた。出席したいと言ってきたのは5~6名だったが、実際に参加したのは、増澤、岡沢、鈴木、の3人だけで有った。少人数だったが、岡沢君は久しぶりの面談だったので、3人で色々話ができて、とても良い時間を過ごせた。特に岡沢君は、学長と同じ高校の出身で有ることが判り、学長とも直接話ができて、貴重な機会になったと喜んでくれた。

B) 大学の教員をすることになった経緯と大学での活動

2003年秋、旧知であった早稲田大学理工学部の大成教授から突然電話を頂いた。どこかで会えないかと言う事で、私がメンバーになっている銀座交詢社で会食をしながらお話を伺った。

先生は当時政府の理系教育再生諮問委員会の座長を務めておられ、答申をまとめて政府に提出されたところであった。我が国の経済再生の鍵は世界に誇る理系のグローバルリーダーの育成にあると先生は言われるのである。

いろいろ議論はあるものの、日本の会社、タイの会社、アメリカの会社、オランダの会社で仕事をしながら、日本の強みはなんだろうといつも考え続けていた私にとっては、十分納得のいくお話であった。早稲田大学では直ちに理工学部の大学院の中に、技術者として一流の技術を持ちさらに将来世界のグローバル企業のリーダーとなる能力を持った若者を教育する新学部(大学院なので専攻科)を立ち上げることにしたと言うのである。学部作りは着々と進んでいるのだが、学生にグローバルリーダーの実際を教える先生が居ないというのである。

学者はこの分野でも沢山おられ、人材に困らないのだが、本当にグローバルな環境では、何が起こり、どう対処するかを知っている日本人が殆ど居ないというのである。早稲田にはグローバルな日本企業で、経営者を務められた方も沢山いるのだが、日系企業はグローバルと言っても、殆どは日本のやり方を基本にしており、グローバルではない。

新しい学部のその講義をどうしたらよいか考え、カリキュラムを作り、授業を持ってほしいというのが今回の会合の趣旨である、との事であった。正直大変びっくりした。私は武蔵工大卒業であり、博士号も持っていない。学会での論文発表も30年も前に沖電気の時代に2~3発表しているだけで、学者としての実績が何もない。評価して頂いているのは光栄だが、その私が日本のトップとして知られている早稲田大学の理工学部大学院の教員になることなど考えられるのかと疑問をぶつけた。大成先生はもちろん教授会の審議事項であり、大成先生は推薦者であるに過ぎない、鈴木が了解してくれば、教授会にかけ準備に入る訳で、確定ではないが、了解してくれないかと言うもの

でした。

色々な可能性を検討してきたが、他に鈴木さんほど条件のそろった人はいないので、是非やってほしいと言われるのであった。

大成先生(前日本経営工学会会長)とは先生が早稲田に戻られる前、勤めておられた日立製作所の生産技術研究所時代からの30年来のお付き合いであり、海外の案件を含め私の実力も仕事を通してよく知っていただいていたので、日本の若者のためになるなら、と言う事で、前向きな返答をさせていただいた。

当時やっていた仕事をそのまま続けさせてもらうと言う条件も付けさせていただいた。

ところが、それから教授会の最終認可が下りるまで1年半ほどかかったと記憶している。色々あったのでは無いかと、推察されるが早稲田大学院博士課程で講義を持つ事は決まったのである。

丁度同じころ、母校武蔵工業大学の経営システム工学科の横山主任教授から頼まれ、年に1~2回経営工学科の学生に、グローバルマネージメントの講演を始めていた。

その理由は60歳を過ぎたら、自分の時間の何割かは、自分を育ててくれた方にお礼をするために使うという、私の人生観に合致していたためだったと思う。

ある日 横山先生と中村学長にごあいさつに伺ったところ、母校のために常勤で出勤は週の半分ほどでよいので大学へ来てくれないかと言う、お申し出を受けた。早稲田だけでも精一杯だと思っていたので、今まで通り年数回の講演会は、受けるので、常勤は無理である旨お断りした。

その後殆ど毎日、人を介してお誘いを受けたが、固辞し続けた。一週間ぐらいしたころ、大学の先輩であり、大学で教員をしてこれられた尊敬するある方から、電話を頂いた。学長がどうしても鈴木さんを説得せよと言っている。君らが説得出来ないのならば、学長が鈴木さんの自宅へ出向き、三顧の礼を尽くしてでも説得すると言っている、そんな事をされては、同窓生の教職員としては面目が丸つぶれである、どうしても“うん”と言ってほしいと言うのである。そこまで言ってくださるのでは、断る訳にはいかないが、早稲田大学との約束が先であり、早稲田が納得してくれば、受けますと返事をして、その場を治めたと記憶している。

早稲田大学に連絡を入れたところ、客員教授クラスの役職を用意してくれたが、その役職で他大学の兼任は出来ないことが判明した。しかし非常勤講師であれば、武蔵工大の授業も引き受けられるし、自分でやっている会社もそのまま兼任することが出来るという事で有ったので、早稲田では大学院の非常勤講師兼プログラムディレクターと言う役職で、兼任を認めてくれると言う事に落ち着いた。

東京都市大学のほうも、その後、私の調査ために組織された資格委員会の審議、教授会の決定を受けて、学長から辞令を頂き2010年4月常勤の東京都市大学特任教授として勤めることが決定したのである。

以上のようなことは、教育に携わってこられた方にとっては、当たり前なことかもしれないが、この記事を読んでくれている通友会、通工会の方の大部分の方は、大学の仕組みに驚くことも多かったのではないのでしょうか？大学の常識を知らない私にとっても驚くことの多い経験でした。

次に、それでは教員になった私は何をしたかを次に書いてみます。

1. 通信科の卒業生として行った事

- ・通友会の役員として、殆どすべて役員会に参加し、いろいろ提案を行った。通工会と共同で卒業生の講演会を在校生向きに実行するお手伝い、講師紹介等。
- ・武蔵工業会と大学の関係修復のため、いろいろ活動した。
- ・知識工学部発足時に消滅してしまった、通信の名前復活のため、いろいろ活動しました。その効果も多少は有って昨年より通信の名前の付いた学科名になった。
- ・通友会副会長として、大島会長の意向を受けて、情報通信工学部主任教授と会合を持ち、今年から通友会賞を善行のあった学生に贈呈することになった。
- ・建築学科の同窓会で有る如学会に会長代行で出席した。

2. 経営システム工学科教員として行った事

- ・応用情報工学科から経営システム工学科への学科名変更に伴う、学科全体の新たなカリキュラム方針作成のたたき台作りをした。

- ・経営管理講義の2年生対象教育体制を作成した。
- ・グローバルマネジメント教育内容を作成した。(高学年対象)
- ・私が招待した外国人訪問者による学生向け英語による講義機会を数回行った。
- ・私の退職後ご担当いただける、数人の教員を推挙出来た。

経営システム工学科の今後の発展にこれらの先生が大いに寄与するでしょう。

3. 大学のために必要と考え、独自に行った事

- ・武蔵工大卒業の上場企業経営者を軸に経営者の会を他の方の助力を頂いて組織した。
- ・上記経営者の会の御協力を得て、卒業生経営者の声を、学生に届けた。
- ・渋谷の東京都市大学キャンパスを使って、学生に実際のグローバルな経営者の話を聞く連続授業を毎年行った。(卒業生も参加資格がある形も試行して)、渋谷を使う将来の社会人向け大学院構想の実験を成功させた。
- ・海外インターンシップと言う新しい仕組みを大学に作り、毎年20名近い学生を海外企業に派遣して研修をさせる、他の大学にない仕組みを作り上げた。
- ・(学内に全学海外インターンシップWGを発足させ、WG座長を務めた)知識工学部国際委員会委員として、グローバルな観点から、いくつかの提案や講演会の企画、実施などを行った。

4. 私はこの3月大学を定年退職する予定である

この4年間と少しの間、上記のような多くの事をやらせていただき、この間、時には傍若無人と言われることも恐れず信ずることを十分やらせていただいた。私の気持ちの中に、頼まれてやる以上、人の顔色をうかがうのではなく、自分に出来る事で、かつ自分が信じたこの大学を良くすることはすべてやろうと言う信念があった。実行するために予算がなければ、自分の金を使う事も当然と考え、年間数百万円ずつは、大学のために使ったと思う。しかし同時に沢山の方のサポートがあって初めて成功したわけで、私一人では何もできなかったであろう。自分の姿を見て、大学を通して私の仕事に寄付をくださった方が出現した。びっくりしたが有り難い事であった。

私の研究室の数人の学生がこの恩恵を頂戴した。

また、五島育英会は、海外インターンシップに行く学生のために、毎年奨学金を準備して下さった。今年は年間20名の学生が恩恵を受けた。学内では、そんな私を苦々しく思う方もかなりおられた様である。色々な場面で、育英会理事長、専務理事、総務理事、大学学長、事務長、山本学部長、横山主任教授など多くの方に支えられ、具体化段階では、多くの会社時代の友人達、大学の工学部講師の桃沢先生、桐生教授、皆川教授、知識工学部の大久保准教授、金川教授、薩川先生、事務局の住田課長、事務の方、そして前向きな学生達の協力で、困難な改革も前に推し進められた。

もちろん教育にも大いに自分の思いを形にし、学生が受け入れやすいように、双方向で授業を進める、講義形式を基本とした。

そんな自分自身を私はやはり学者ではなく経営者なんだと、自分で納得した次第である。

まだ途上の案件も多々あるが、4年間の在籍期間中でやるべきことをやり切り、満足感でいっぱいです。これからは若い方に良い部分を引き継いでもらい日本国をそして東京都市大学を世界の人から尊敬される世界トップクラスとして継続できるよう、学外からエールを送りたいと思います。

しかし、人生の後半で、本音で学生と議論をしたり、信ずる道を熱く語ったりして、少しは前に進められたのは、機会をくださった大成先生、横山先生、中村学長などの方のお陰であります。皆さんに感謝、感謝です。

現職

東京都市大学 知識工学部 経営システム工学科 特任教授

兼任；早稲田大学理工学術院(大学院)講師兼プログラムディレクター

兼任；株式会社 エグゼック 取締役会長

兼任；株式会社 エグゼクティブ・コンサルティング 代表取締役社長

東京都市大学 通友会副会長、校友会理事 都市大付属中学校同窓会理事 等、

パチェラー7 初代グループ演奏風景

石井 寛 (S.43)

E-mail : yishii@mte.biglobe.ne.jp

全体での活動は行っていません。(期幹事の不精で申し訳ありません。私が何で期幹事になってしまったのかも思い出せません)

一部の方とは年賀状のやりとりで近況報告をさせていただいています。

私は顔を出せていませんが所属したクラブ単位、遊び(マージャン他)仲間、研究室単位などで時々集まっているようです。その中でも通信科の43年度のメンバーが中心となって作られた同好会がクラブとなっていてまだに続いているパチェラー7は時代時代に演奏内容を変化させながら続いているのは音楽系クラブとしては驚異的です。しかも初代を含めたOBが集まって年に1回演奏会をおこなっています。私も初代と同期の縁で昨年から参加させてもらっています。



初代グループ演奏



初代グループ演奏一還暦ライブ

3年前にサラリーマンから開放されたところへバンド仲間から声をかけられ、楽器をいじり始め音を出すのに半年ほどかかりましたが、いまは楽

しく練習、お付き合いさせてもらっています。練習で集まると話題の三分の一は病気の話でさすがに年を感じますが演奏を始めると昔に戻るようです？

健康第一、ぴんぴんころりといきたいですね。

65年度入学生OB会 “ロクゴー会” の変遷

伊東 俊彦 (S.44)

E-mail : toko-ito-yama@k5.dion.ne.jp

わたしたち1965年度入学の同期メンバーが卒業後5年目(1974年)の正月に集まって新年会を開催したのがこの話のテーマである「ロクゴー会」の始まりです。最初は、在学中のクラス新聞(枯道:カレジ)の発行メンバーから村山和夫氏と伊東俊彦、OB会代表の中田良英氏、そして崎詰素之崎氏と山中航夫氏の5名が中田宅に集まりごちんまりと始めました。やがて3年目の1976年には、世話役の伊東の居住地である神奈川県大和市で開催し、メンバーも10名程度に拡大しました。あるとき、新年会の最中から大雪が降りやまず、電車もストップする状況で、参加者のほとんどが伊東家に流れそこで夜通し語りふかすということがありました。その後は2次会を伊東家で次の朝まで続けるという習慣になりました。その後、渋谷、赤坂、西新宿での開催と変遷して、今日まで毎年欠かさず続け、今年(2014年1月25日)で39回目となります。ところで「ロクゴー会」の名前は1992年の名簿に伊東が記載したことで始まり、当初は「ロクゴー会、65会、六郷会」と併記し、その意味普及に努めましたが、やがて「ロクゴー会」が定着した次第です。毎年、1月の第3または第4土曜に西新宿の日本料理「花車」で新年



2014年 新年会

会を開催し、花車での開催も19回目となります。生き馬の目を抜く新宿において店がつぶれず、いつも同じ場所で開催出来るのも幹事にとってはありがたいことです。

新年会では各自が昨年の振り返りと今年1年の抱負を述べるのが習慣となっています。現役のときには、一人で5分以上話す者がおり、順番が回らないからと、中断を促すことも多かったが、ほとんどが定年退職の今では、5分持たない者ばかりとなったのは、ちょっと寂しいかぎりです。最近は孫自慢や病気の話などで時間を稼ぐようになりました。また一昨年までは夜の6時半からの開催でしたが、昨年から4時の開始に変えました。部屋も座敷で低い椅子席となり、これには、参加者のほとんどが満足されています。「ロクゴー会」の幹事はだんだん増えて現在は8名(崎詰、中田、村山、荻原幸長、辻 孝寿、鍋島陽一郎、馬淵幸彦、伊東)となっています。新年会の連絡はもちろんメールリストを活用していますが、毎年12月と1月以外は、メールのやりとりが閑散とするのは致し方ないと思っています。

しかし、この新年会のおかげで、ビジネスや遊びのアイデアを得られたり、将来への不安を共有することで、勇気を得られることが、参加者の一番のメリットと感じています。現在の参加者は30名強と、同期在籍数の4分の1弱ですが、東京近辺からの参加が主なため、この程度を維持していきたいと願っています。聞いている範囲で鬼籍に入った人は3名とのことですが、これからも息の続く限り、毎年の新年会に参加することを、ひとつの張り合いにして、幹事のみなさんといっしょに、「ロクゴー会」への参加とその維持を続けていきたいと思えます。

わたしの近況

重藤 隆 (S.45)

平成25年(2013年)6月末をもってBSフジを退職した。(現在は、非常勤の顧問)昭和45年(1970年)にフジテレビに入社し、平成10年(1998年)にBS放送立ち上げのためBSフジに配属された。43年間の仕事では、放送技術の変遷とともに、たくさんの新技術を経験できた。振り返ってみれば、モノクロからカラー、VTRにおいては、2吋1吋 デジタル メモリー(テープではない)を、

それから放送方式のアナログからデジタルなどたくさんのエポックに立ち会えたことは、とてもハッピーなことであったと思う。

退職後は、通勤というものがなくなり、そして灼熱の夏の季節をむかえ、熱中症を恐れ散歩も控えた結果、秋には持病の糖尿病の数値がすっかり悪化してしまった。ホームドクターからはくすりをのむように言われたが、のみたくないので食事療法と運動で頑張るからということで2ヶ月間の猶予期間をもらった。それからは、短期決戦なので、まず食事は低炭水化食に徹した。炭水化物をとらなければ血糖値はあがらない。これを長期間続けるとさまざまな障害が出てくるのだが、2ヶ月という目標時点までと割り切った。運動は、歩行中心で最短で5km、多い日には15kmくらい歩く。その結果、12月中旬のドックでの数値は、元に戻るまではいかなかったが、一応くすりをのむことから逃れられた。糖尿病は一生つづく病なので、日々の心がけが大切。

努力は、まだまだ続く。



肉体改造と並行して行われたのが、女房の母親の介護である。母親は昨年10月に、百歳をむかえた。15年前に認知症を発症し、施設にお世話になっていたのだが、百歳になってからは眠っていることも多く、また食事や水分の摂取量が減少し、数日ごとに病院へ点滴に通うようになった。血液検査での腫瘍マーカーの数値によると多臓器にガンの発症を示していた。そんな折、ホームドクターとの話の中で母親について聞かれた。母親の近況を告げると終末医療のトレンドは、栄養や水分補給などの延命処置は行わず、昔のように老衰への道を辿るように何もしないことだそうだ。水分を入れると最期は苦しむそうで、枯れることがいいそうだ。

わたしは以前から気になっていた、中村仁一(医師)の著書「大往生したけりゃ医療とかかわるな」をこの機会に読んだ。その中では、「高齢のガンの方で、抗がん剤や放射線治療をしなければ、末期を迎えても、一般的に言われる壮絶なる

痛みを襲われない。食事が摂れなくなったら、何もしない。飢餓と脱水状態が脳内モルヒネの エンドフィンが発生させ、とてもいい気持ちで最期を迎えられる。」とホームドクターと同じようなことを言っている。女房と相談し、看取りは自宅だと決断した。11月4日に我が家に引き取り、約一週間後、安らかな最期を迎えることができた。自分たちの最期も是非このようにしてもらいたいと強く思った。忘れずにエンディングノートに書いておこう。

昨今、いじめや殺伐とした人間関係が元になっていると思われる事件がよく見受けられる。人の痛みがわかる優しい心を日本人は忘れてしまったのだろうか？わたしはそのような原因のひとつに核家族化が影響していると思っている。時代背景は今とは違うが、昔は老人のいる二世帯、三世帯の家族が当たり前であったとおもう。

親にしかられたり友達とうまくいかないときなど悩み事を聞いてくれる駆け込み寺的存在だった年寄りがいない。学校から帰ってくると年寄りには家にいて、誰もいないことは少なかったと思う。そんなことを考えていた折、青森県弘前市に住む長男夫婦から家の購入を考えていることを聞いた。子供二人の四人家族だ。

以前は、自分達は年老いたら施設に入って終末を迎えようと考えていた。よく言われる、「子供に迷惑をかけないように。」だった。しかし、老人のいる家庭を孫たちにあじあわせ、歳をとるといったことはどういうことか、そして死んでいくとはどういうことかを、身をもって示したいと強く思うようになり、「一緒に住もう。」ということで、長男夫婦を説得し家を建てることとした。かれらにとっては降って湧いた災難かと思うが、そこはこちらが元気なうちに行って、お役に立てるところはギブし、最期はテイクさせてもらう。長男は仕事柄(産婦人科医)、家にいる時間がほとんどなく、母子家庭状態なので少しは役に立てるかと思っています。



そんなこんなで急遽住宅メーカーと打ち合わせ昨年11月に家が完成し、長男夫婦は12月から住んでいる。私たちは、雪が消える4月中旬に転居しようと考えている。よき、じいさん、ばあさんになれるかな？

1970年入学電子通信工学科の近況

坂本 芳博 (S.49)

卒業38年余を経、還暦を迎えるのを機にクラス会を平成24年1月21日(土)「東京都市大学尾山台キャンパス(五島記念館)メモリアルホール」にて開催いたしました。

当日は高岡先生、金子先生、増澤先生のご三方にもご多忙にもかかわらずご出席も頂き30余名が参加されました。

卒業後初めて大学へ来られる方もありキャンパス見学会も企画し、整った学内環境を見て、改めて当時は振り返る良い機会になったようです。また、二次会も懐かしい「自由が丘」で盛り上がり、成功裡に終了することができました。

次回も多くの方々参加をお待ちしております。



昭和45年入学者は当時の学園紛争の影響もあり、卒年度が49年、50年に渡っています。

よって、同期会は45年入学者を対象に案内していることをご承知ください。



ホームカミングデーに

高坂 徹 (S.57 院S.59)

E-mail : kosaka@s4.dion.ne.jp

卒業以来、活動らしいことは何もしてこなかったのですが、2012年3月12日に卒論・修論で大変お世話になった今井先生のご退職を記念し、音響研同窓会を開催しました。開催するに当たり、幹事をお願いできそうな方と音響研究室と音響研究会で顔見知りの方にお声がけし、東京都市大学世田谷祭に併せて開催された第3回ホームカミングデー(2011年11月)に集まりました。

これがきっかけとなり、毎年ホームカミングデーには80年～84年卒の旧知の方々が集まるようになっていきます。今度のホームカミングデーは卒業30年目の84年卒の方々が招待されますので、卒業以来来ていない方々にお会いできるのではないかと楽しみにしています。

因みに、ホームカミングデーは卒業生であればどなたでも参加できますので、皆様是非ご参加下さい。



近況報告

網屋 庄二 (H.19 院H.21)

お久しぶりです。最近私事ですが第一子が誕生しました。名前は網屋匡人(マサト)となりました。

秋谷先生には在学中、また結婚式でも大変お世話になりました。今後もよろしく願います。また住所も変更しております。

我々の年代では、特に集まることは少なく個々で少人数で集まっているようです。



平成24年度、25年度 通友会・総会報告

1. 平成24年度の通友会総会について

平成24年度の通友会総会は平成24年6月2日(土)に学内で行われました。

今回は大島新会長の下での初めての総会です。従来の各期幹事等による幹事会を取り止め、2:00PMより直ちに総会が開催されました。審議内容は、平成23年度事業報告、収支決算報告、会計監査報告、続いて平成24年度事業計画案、予算計画案、役員および各期幹事、指名幹事の選出、を審議の後、いずれも原案通り承認または可決されました。

引き続き同じ教室で第2部の講演会となり、昭和53年度機械工学科卒、看護士の原田 清様により「技術者より看護師へ、私の人生」というタイトルで講演が行われました。これまでの通友会会員による講演会とは一味変わったユニークな講演会でした。

最後に第3部として、武蔵工業会理事長代理松村慶一様、機親会会長 山縣輝輔様、電友会会長代理 堀内則量様等のご来賓をお招きして懇親会が生体医工学科の秋谷先生の司会で進められ、次年度の再会を約束して盛大の内にお開きとなりました。 秋谷(S.46)記

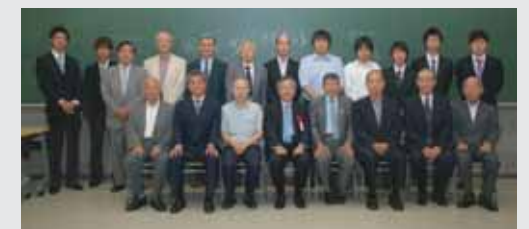
2. 平成25年度の通友会総会について

平成25年度の通友会総会は平成25年6月8日(土)に学内で行われました。

審議内容は、平成24年度事業報告、収支決算報告、会計監査報告、役員および各期幹事、指名幹事の選出、続いて平成25年度事業計画案、予算計画案であり審議の後、いずれも原案通り承認または可決されました。なお、通友会会則・細則については今後一部を修正することで大筋で承認されました。

引き続き行われた講演会は演題『電気通信によらない情報伝達 自分の遺伝子情報を知る。』講師 天野 卓 様(元東京農業大学農学部教授)というもので、通信という分野とは違った意味で大変興味深い内容のものでした。講演会後の懇親会は、場所を3号館4FのメモリアルホールAに移し、大島弘之会長の開会の挨拶の後、ご来賓として吉田勝 武蔵工業会副理事長、藤川英司 電友会会長並びに山岡嘉彌 如学会会長の挨拶で始まりました。

なお、本年度は3月に定年退職した生体医工学科所属の秋谷昌宏教授(S.46)への感謝会も兼ねており同教授への花束贈呈式や御礼の挨拶等も途中盛り込みながら進行し、和やかなうちにお開きとなりました。 秋谷(S.46)記



通友会賞の報告

通友会会長から「通友会賞」の制定が発案され、役員会で検討する傍ら、情報通信工学科主任教授 佐和橋先生に相談したところ、とんとん拍子に具体化し、主任教授名で下記のような平成25年度の募集要項が学内掲示板に掲示され募集が行われました。

平成25年度の受賞者は、3年生の森 拓也君に教室会議で決定しています。

募集要項には表彰は卒業式の日になっていますが、今年は通友会総会当日に行われる予定です。

なお、受賞者には賞状とささやかな副賞を贈呈します。

H25年度「通友会賞」の募集について

知識工学部情報ネットワーク工学科及び情報通信工学科の学生(1～4年生)を対象として、平成25年度(H25.4.1～H26.2.28の期間とします)に学内及び学外の顕著な本学あるいは本学科の知名度の向上に貢献する活動、社会貢献活動に対し、「通友会」賞として個人を表彰しますので、奮ってご応募ください。

表彰の基準

表彰の対象となる本学あるいは本学科の知名度の向上に貢献する活動、及び社会貢献活動は、次の各項に該当するものとする。

- ・学会における受賞など、学術的に本学あるいは本学科の知名度の向上に貢献した場合
- ・学内、学外の競技会において、優れた成績をあげ、本学あるいは本学科の知名度の向上に貢献した場合
- ・通工会など学科の活動に貢献した場合
- ・ボランティアなどの顕著な社会的貢献を行い、本学科の学生として学内外にアピールする活動を行った場合
- ・その他、前各項に準ずる貢献があったと認められる場合

応募方法

学科のホームページにある、応募フォーマットをダウンロードし、所定事項を記入して、学科主任の佐和橋までメールで送ってください。(sawahasi@tcu.ac.jp)

応募締切

2014年(平成26年)3月3日(月)

表彰者の表彰日

2014年(平成26年)3月19日(水) 表彰者には個別に、別途、連絡します。

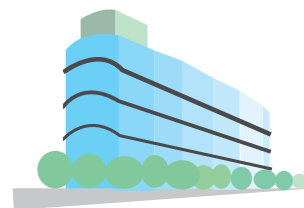
2014.1.22 学科主任 佐和橋 衛

平成26年度 東京都市大学 校友会 総会のお知らせ

*日 時：平成26年 6月21日(土)午後3時より

*場 所：東京都市大学 世田谷キャンパス 2号館 1階 21C 教室

*懇親会：学生食堂(午後5時より)



会員交流回路

次の方々が鬼籍に入られました。
謹んでご冥福をお祈りします(合掌)

| | | | |
|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 竹田 信彦 (S.22) | 平成24年04月03日 | 岡田 茂 (S.34) | ご逝去年月日不明 |
| 徳江 武彦 (S.22) | 平成23年11月29日 | 吉田 務 (S.35) | ご逝去年月日不明 |
| 渡邊 健二郎 (S.22) | 平成24年04月 | 香月 一三 (S.36) | 平成24年01月07日 |
| 三松 昭典 (S.23) | 平成25年05月08日 | 林 吉彦 (S.38) | 平成23年01月30日 |
| 島田 泰介 (S.24) | 平成24年07月08日 | 遠藤 保夫 (S.41) | 平成23年06月18日 |
| 民野 庄造 (S.30) | ご逝去年月日不明 | 松永 勝利 (S.42) | 平成23年03月23日 |
| 今井 昌平 (S.32) | 平成25年02月13日 | 小森 俊雄 (S.48) | 平成24年06月02日 |
| 菅原 重 (S.33) | 平成25年01月02日 | 小松 太一 (H.09) | ご逝去年月日不明 |

会費(20年・終身)納入及び寄付金のお願い

本年度の終身会費は、1993、1994年(平成5、6年)卒業の方が対象となります。対象の方は本号に同封の振替用紙により、平成26年6月末までにA)終身会費(1万円)をご送金頂きたくお願い致します。また、卒業時に納入するB)20年会費(5千円)ならびに、過去の終身会費未納入の方、すなわち、C)終身会費(1万円)『1992年(平成4年)以前に卒業された方』も対象となります。

これらの方々にも同じ振替用紙を同封しますので、至急お振り込みをお願い致します。また既にお振り込み済の方にも同様な振替用紙を同封しておりますが事務処理の簡素化のためです。何卒ご容赦下さい。もし、ご自分で過去に振込みの確認ができない場合には配送された封筒のラベルをご覧ください。

ラベルの氏名欄の右下最下行に8桁の数字列がありますが、その直ぐ後に上記A)、B)、C)の区分が書かれていますので、これに相当される方はお支払いをお願いします。なお、大変心苦しい事ですが運営資金維持のために、会費未納の方には今後のFLUXの送付を中止させていただく予定です。本年は何卒納入されるようご協力お願いいたします。

更に今回から通友会に対する寄付金を募集します。最低1,000円より上限額は定めません。既に通友会費を支払い済みの方あるいは、今回お支払いいただく方、ご寄付いただける方は振替用紙の通信欄D)、のボックスにチェックを入れ、金額欄にご記入の上、郵便局窓口、ATMにてお支払いいただけますと今後の通友会運営に於いて大変有難いと存じます。

なお、これまでは御退職の先生方に対しては、記念品代として別枠で募金を行っておりましたが、これからはこれらの記念品代も含めた募金とさせていただきますと考えております。今回は、秋谷先生もご了解済で自分あての募金は全て通友会へ寄付する旨のご返事をいただいております。

東京都市大学 校友会のホームページの中に通友会のページがありますのでそちらもご覧ください。



編集後記

東京都市大学の情報ネットワーク工学科が情報通信工学科に改称して、通信科の香りのする学科となったことは嬉しいことです。今回は秋谷昌宏先生のご退職記念号です。武蔵工大の通信科を代表する生抜きの先生ですので、ご健康に留意されてこれからも武蔵工大・東京都市大の通信科と通友会、通工会を支えていただきたいと思います。今号から会員からのお便りのコーナーを充実させることになりました。如何でしょうか。お楽しみいただければ幸いです。でもアカデミックな香りも大切にしていきたいですね。

最後に私事です。勤務先である桐蔭横浜大学での本務に専念するため本号をもちまして編集員をしばらくの間、退任させていただきたく存じます。長い間のご指導を賜りまして本当にありがとうございました。

(竹内 S.54 院 S.56)